



| 2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書 | | | 2025/9/30 | | | |
|--|--|--|--|---|--|----------|
| 団体名 | NPO法人 リエゾン | 活動タイトル | 地域と家庭と学校 みんなが笑顔でつながる子どもの居場所づくり | | | |
| 望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤） | | | ■活動風景 | | | |
| ●地域の望ましい社会状況(ビジョン) | 「地域・家庭・学校が連携し子どもや大人の笑顔が輝く社会」を目指しています。令和4年度の文部科学省統計の不登校生数は29万9,048人と前年より5万4108人増えました。学校に行かない選択をした子どもたちが、将来社会の一員として自立し、市民として活躍できるようになることは、社会にとってとても重要なことです。社会には大人になってからも引きこもり、社会から疎外されている方がたくさんいます。そうした人々が、子どものころから家庭・学校以外に居場所をみつければ、社会で生きていく力を身につけていくことができれば、大人になってからの引きこもりが減少し、社会活動に参加して活躍することができます。市民一人一人が輝くことができる社会をめざします。 | | <div>農業体験で近くの畑に行きました</div>  | | | |
| ●団体の社会的役割(ミッション) | 子どもの居場所づくりとして、様々な事業を実施します。学校・家庭以外の地域社会の中で子どもたちにとって安心・安全な居場所が増えることで、すべての子どもたちが健やかに成長し、将来自立し、社会の一員として活躍できるようになることが、団体の社会的な役割です。特に学校に行かない不登校の子どもたちの居場所をつくり、その子どもたちや保護者の支援をすることで学校や社会につなげていくことが役割です。そのため以下の取組を実施します。 1）不登校の子どもたちの社会的自立を促進するための居場所をつくる。 2）子どもを育てる大人が悩みや喜びを共有できる「相談場所」「集いの場所」を開催する。 3）スポーツを通して子どもたちの健全育成を促進する活動を行う。 | | | | | |
| ●団体の活動基盤 | ●人的資源：フリースクールに通う子どもたちを支援する常勤のスタッフが複数名在籍し、広報や事務処理を担うとともに、不登校児童・生徒と共に活動し支援することができること。また活動をサポートするボランティアが常時複数名在籍し必要に応じて子どもたちの支援ができるように活躍していること。 ●物的資源：不登校児童・生徒が必要とする学習教材やゲーム、スポーツ用品、事務用品などがあり、子どもたちにとって居心地の良い空間で、安全・安心な居場所が確保されていること ●活動資金：団体の常勤スタッフの人件費や活動資金が会費、寄付、自主事業により十分に確保され、子どもの活動や保護者の支援が行える財源を確保できていること ●情報：不登校児童・生徒の学校での様子、関係機関での情報、家庭の情報が常に共有され子どもたちの健全な育成にとって必要な連携が取れていること。SNSでの情報発信が頻繁に更新されている | | | | | |
| ■活動報告 | | ■1年間の目標に対する達成状況(まとめ) | | <div>日清カップヌードル館へお出かけ。自分だけのカップヌードルをつくりました</div>  | | |
| ●週3回の不登校生のための居場所（9時～14時）を開くことができた。小学生 中学生の参加者は、場面緘黙であったり、コミュニケーションが苦手であったり様々な課題を抱えているが、活動を通じて、会話ができるようになったり、みんなと食事ができるようになったり、困りごとを自分たちで解決できるようになったりと少しずつ成長している。 ●学校との連携もスムーズに実施できており、当法人の活動への参加者は出席を認めてもらっている。ケース会議や研修に呼ばれることもあり、学校関係者にも一定の信頼を得ている。保護者から相談を受け、保護者が立ち上げた親の会は、多くの参加者を得てリーフレットを作成するなど活動の輪を広げている。 ●相談活動においては、面談や電話相談など定期的な相談を受けており、今後は、必要な相談者に情報が届くように広報活動もさらに充実させていく必要があると考えている。 | | 1年間で、中学生2名、小学生5名、合計7人の会員が当法人で活動した。子どもたちのコミュニケーション能力の向上、学校への登校日数の増加、社会的な活動への参加促進、保護者の精神的な安定を目標に活動してきた。日々の活動の中で日誌や月の活動報告を振り返ると、場面緘黙の中学生が言葉を発するようになった。 学校に登校していなかった小学生が、週1回登校し、林間学習の宿泊活動に参加した。柏原市教育支援センターなど公的機関の活動に参加するようになるなど、多くの成果が見られた。ケース会議や学校との連携を通じて保護者の様子を把握すると精神的に疲弊していた保護者が前向きになってきたりする成果もある。活動への参加者が増えることで達成状況が確実に増えてきている。 | | | | |
| ■事業を通して得られたノウハウ | | ■望ましい社会状況を達成するための課題 | | ■活動成果のアピールポイント（自由記入） | | |
| 学校に行かない子どもたちが、社会に必要な生きる力を身につけていくために、フリースクールなどの居場所が必要である。ただし集団の中で身につく社会性や生きていくために必要な最低限の学力をフリースクールにおいて担えるかは難しいと思われる。その意味で学校は子どもたちの成長にとって大きな居場所であることは間違いない。適切な時期やタイミングで、少しでも学校への復帰を子どもたちがめざしていくことは、必要であると考えられる。 | | 小学校・中学校における不登校生の進路は、通信制の高等学校を選択するケースが多い。通信制高等学校の中には実際の登校が、1週間に満たなくても卒業でき、高校卒業資格を取得できる学校もある。 義務教育で不登校だった子どもたちが、社会とかかわりをもたないまま、社会に出ていくケースが見られる。中にはそのまま社会に出ず、大人になっても引きこもってしまうケースもある。個人に応じた適切な時期に社会とかかわりを持ち、社会人として働く意欲を持ち、社会に出ていくきっかけを持つことが今後も必要であり、ますます増えていくであろう不登校生の社会とかかわりが今後も求められていく。 | | この1年間の活動を通じて | 学校に行かない子どもたちのコミュニケーション力が向上し、社会性を身につけることを | を達成しました。 |
| | | | | ■受益者の具体的な変化（自由記入） | | |
| | | | | 学校への登校日数が増えた。場面緘黙で人前で話せなかった中学生が話ができるようになった。公的機関へ通いやすくなった。宿泊学習に行くことができた。コミュニケーションが取れるようになった。 | | |